

視点

歩み続ける医師会

It's our pleasure, grow together!



福島県医師会常任理事

齊藤道也

はじめに

医師会の組織力低下がクローズアップされて久しいものがあります。

その昔、小職がまだ子供の頃、1957年から25年もの長期間日本医師会長職にあった武見太郎氏の名前は何度も聞いたことがあり、1960年代の全国一斉休診、保険医総辞退戦術などを含めた医師会運営手法は毀誉褒貶あるとしても当時の巷間の話題をさらったものと思われま

す。厚生官僚とも対決を辞さない武見氏の硬直的姿勢から、ケンカ太郎の異名があった事は先生方のご記憶にもあろうかと思ひます。この時代の日本医師会入会率は55%前後でしたが、「医師会は開業医を代表している！」との発言も繰り返され、国民ばかりでなく医師の間にもいまだに医師会＝開業医のイメージが残っているようです。強く退かない医師会を背景に入会率は最も高かった2001年の60.1%をピークに徐々に低下、2020年は51%程度となりましたが、最新の集計では17万5千人が

加入する医師個人資格で加入する大きな学術団体であり、決して政治団体や圧力団体ではありません。

医師会からの国に対する意見の内容は日本の制度上の職業としての医師を代表してのものとなり、医師会の入会の有無に関わらず医師全体に及んでまいります。

したがって組織率が低くなれば、医師を代表する意見であるとの捉え方が難しくなり、社会における医師会の重要性が相対的に低下し、多岐にわたる医師会活動の効果が出にくくなることが予想されています。

医師会の役割

医師会の役割は端的に申せば

- ① 国民（住民）の生命と健康を守る
- ② 医師の医療活動を支える

この2つはかねてから言われてきたことです。しかし昨今の状況から加えて

- ③ 医師一人ひとりに合った成長を助ける
- ④ 医師同士が繋がりあえる生活空間の一つ

となる

これも会員から求められる大切な内容となってきました。

これからの医師像を考える

私たちは、教科書、歴史書の中でしか語られなかった新興ウイルスによるpandemicを目の当たりにしました。さらに圧倒的スピードでのデジタル変革が社会の常識を変え、人々の価値観を多様化しています。

医師や医療界は、伝統や経験を重んずるあまりに不要な古いものに縛られてはいないのか？このままで良いのでしょうか？

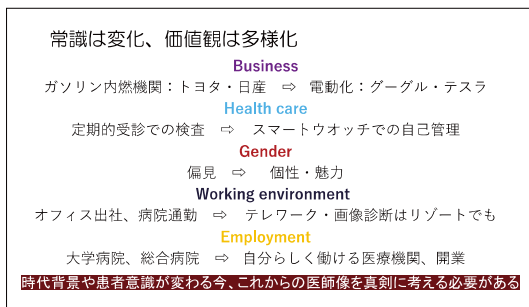
最先端の医療機器、通信機器や検査機器、医薬品は、我々の周りに溢れています。最新のデジタル決済や個人認証もあつという間にも身近なものになってきました。

我々の働く環境や個人の医師としての医療リテラシーはどうでしょうか？

だからこそ医師会は旧態依然とした医療界の常識、価値観を見直し、変えていく必要があると考えます。

医師一人ひとりが自分の未来・医療界の未来を真剣に考え行動する時、それを支える医師会であること、答えがそこになら一緒に悩み一緒に模索する医師会であるべきだと思うのです。(図1)

(図1)



地域に根ざした医師会活動の実際

では実際に医師会に入会した際にどのような活動があるのでしょうか？以下に代表的なものを抜粋しましたが、もちろん、地域の特性、医師会の規模、会員数によって活動ニーズの濃淡はあると思われます。

I 地域の救急活動

地域イベント、災害時の救護班、在宅当番医、休日夜間急病診療所

小さなスポーツ、お祭りイベントも依頼があれば赴きます。また、台風を含む広域災害発生時には自治体との災害対策本部に参画し、救護隊、救護班を組織し避難所まわりを薬剤師会などと連携して行います。休日、祝祭日の一次救急は区割りされた地域を当番で行うことが多いようです。

II 行政への医師会としての公益活動

保健所関連の委員、警察業務への協力、地域ケア会議の出席、障害者認定審査、介護保険認定審査

行政が行っている日々の継続的業務の中には、医師会は学術団体からの有識者として参加、意見を求められるものが数多くあります。

III 地域の公衆衛生活動

学校医、産業医、予防接種、母子保健、市民公開講座

学校保健法や労働安全衛生法に基づく学校医、産業医の選任、業務は医師としての必要な責務です。昨今の新興ウイルス流行からもお分かりの通り、文明社会にとってワクチンの啓発と実施はなくてはならないものとなりました。インターネットなどで情報が氾濫する中、タイムリーな市民公開講座を実施し正確な情報伝達、健康リテラシー向上を図ることは重要な意義を持ちます。

IV 多職種連携活動

在宅医療ネットワーク、介護保険関連文書作成

急速に進行する高齢化社会のなかで、長く

住みやすい街づくりのためには在宅医療、介護に関わる多くの多職種との顔の見える連携が必要であることは言うまでもありません。

V 教育活動

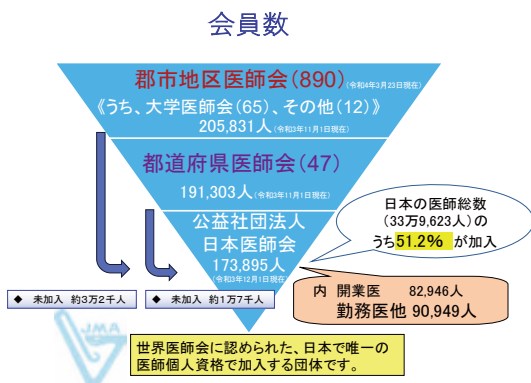
医師会附属看護師等養成所への関与

地域で実際に医療に従事する志のある看護師を養成することは、昭和20年代以降全国各地の医師会の重要な活動となってきました。しかし、看護大学や正看護師養成学校が急増した昨今、准看護師養成は需要と志望者のニーズ、バランスを踏まえて喫緊どうあるべきかを考えるポイントにきています。

医師会組織（図2）

医師会は地区医師会、県医師会、日本医師会の3層構造となっています。地区医師会会員がそのまま日本医師会会員ではなく、中央と地区の差は3万2千人あります。しかし、ここで特筆すべきは会員の過半数は勤務医であるという実態です。福島県においても総会員数2,723名中勤務医会員が1,387名を占め全国的な傾向と同様であり、現在の医師会は開業、勤務の差なく日本における医師として従事する全ての方に開かれた学術団体として活動していることがお分かりいただけるかと思えます。

（図2）



令和5年度からは卒後5年間の会費減免期間延長（これまで、初期臨床研修2年間のみ）がすでに始まっており、若い医師の新規加入（卒後5年までの会員数231名：平均年齢27.3歳）が増えています。しかし5年経過した時に退会されては意味がありません。この5年間で多くの医師会の仲間、先輩にふれあい、強力で豊潤な会員サービスを実感していただき、その後も医師会を支える人材に、我々と一緒に成長していただければと思います。

特に、福島県医師会では会費減免期間中に産業基礎研修50単位を県内で受講し、早期に認定産業医として活動を継続できるようなプログラムの検討が他に先駆けて始まっています。

医師会の強力かつ豊潤なサービス

① 日本医師会医師賠償責任保険

問題発生時に医師本人に代わって、医師会が弁護士を手配し、迅速・適正な紛争解決をサポートするもので、保険料も、各学会や大学同窓会と比較して約半額以下と安価です。

② H P K I（Healthcare Public Key Infrastructure）カードとしての医師資格証発行

2023年1月からすでに運用開始されている電子処方箋を発行するためには、医師自身が国家資格を証明し、電子署名を行う必要があります。現時点でそれを満たす方法は、H P K Iカード（医師資格証）のみですが、日本医師会会員は発行・更新費はすべて無料です。

③ 日本医師会医師年金

積立型の医師専用の終身年金で一生涯受取可能な私的年金で、事務手数料が少額（0.25%）なため効率的な積立が可能です。早期の加入で長期の複利効果を最大限に活かしましょう。

④ 医学図書館、日医L i b（e-Library）

日本医師会館地下1階に約990タイトルの専門雑誌や書籍など、11万点以上の資料を揃え、「文献複写」「文献調査」「利用紹介状による他館利用」「図書貸出」などの各種サービスを提供しています。

⑤ 日本医師会認定スポーツ医制度

地域社会における運動への関心の高まりから、運動を行う人に対して医学的診療のみならず、メディカルチェックや運動処方を行い、各種運動指導等に指導助言を行い得る医師を要請することを目的として、延べ約2万5千人の認定健康スポーツ医を養成しています。

⑥ 日本医師会認定産業医制度

⑦ 日本医師会女性医師バンク

男性医師も利用可能、様々なライフイベントによって働き方に変化が起きる時、費用はすべて無料で専任コーディネーターがきめ細かくサポートしています。

⑧ 医師国民健康保険（医師国保）、医師協同組合、医師信用組合

特に医師国保は医師とその家族が加入する自助的保険であり、医師が自ら運営し、保険料を決定、各種検診などの保健サービスも充実、医師にメリットの大きい健康保険と言えます。

⑨ 日本医師会生涯教育制度

医師の研修意欲をさらに啓発・高揚させる一方、社会に対して医師が勉強に励んでいる実態を示し、国民からの信頼を増すことを目的とした研修会です。

⑩ 日本医師会医学賞（500万円4名）、日本医師会医学研究奨励賞（150万円15名）

毎年医学上重要な功績や将来性のある研究に対し授与されています。

以上は代表的な医師会サービスです。これらを見ても医師にとって日々の診療、生活、学習に少しでも安心が得られるために、医師会がサポートしようとしていることがお分かりいただけるかと思います。

終わりに

社会構造や価値観がどんなに変わっても変わらないもののひとつとして、人類が長年育んできた知恵を私たちは学び続け、それを一つの医学という学問としました。

それは個人の創意工夫や体験だけでは生み出し得ないものであり、先人たちが苦勞して体系付けたものです。私たち医師会は医学を根幹に、社会、時代が求める医師像、そして自らが求める医師像に寄り添いながら、

●必要とされる学術団体として今後も存在し得るのか？

●Technologyの進歩に伴う医学のこれからは人類の悲願を叶えることができるのか？

多くの命題が残されています。医師会とともに変革し一緒に見守ってください。医師会はあなたのいつも身近なところにいます。

医師会は出身地、大学、入局先を超えて、これからの目標を一緒に見据えて活動できる唯一無二の団体です。困っていること、改善の余地、無理難題をどうぞお聞かせください。

それこそが、It's our pleasure, grow together!